

日本文学を世界文学として読む

二〇一八年度「文学研究科プロジェクト」成果報告書

世界文学と「地方」	堀 まどか (1)
——野口米次郎とシカゴの詩雑誌『ポエトリ』	
片山廣子の新体詩「あかき貝」について	
——クリステイーナ・ロセッティ『シング・ソング童謡集』との関わり	永井 泉 (18)
『太平記』引用説話の典拠と文脈	
——英訳『太平記』の注記を端緒として	大坪 亮介 (32)
和歌と漢詩	
——平安朝における実例をめぐって	山本 真由子 (44)
芥川龍之介から堀辰雄へ	
——『玉書』の受容から見る東西意識	劉 娟 左 (31)
芥川龍之介「秋山図」など	
——世界文学としての芥川作品	奥野 久美子 左 (18)
『オデュッセイア』の類話における英雄像比較	
——オデュッセウス、百合若大臣、ポイヤウンペ	高島 葉子 左 (1)
あとがき	(i)



Urban-Culture Research Center

大阪市立大学大学院文学研究科 都市文化研究センター

Reading Japanese Literature as World Literature

World Literature and the Local: Yone Noguchi and *Poetry* - a Chicago Journal of Verse

HORI Madoka 1

An Analysis of the poem "A Red Shell (Akaki-kai)" by Hiroko Karayama:

The Influence of *Sing-Song: A Nursery Rhyme Book* by Christina Rossetti

NAGAI Izumi 18

Issues on the Sources and Contexts of the Stories quoted in *Taiheiki*:

Considering McCullough's Notes as a Clue

ŌTSUBO Ryōsuke 32

Waka and Sinitic Poetry: Examples in the Heian Period

YAMAMOTO Mayuko 44

From Ryūnosuke Akutagawa to Tatsuo Hori:

The Orient and the Occident in their Interpretation of *Le Livre de Jade*

LIU JUAN left 31

"Autumn Mountains (*Shūzan-zu*)" by Ryūnosuke Akutagawa:

Akutagawa's Works as World Literature

OKUNO Kumiko left 18

Odysseus, Yuriwaka-daijin, and Poyyaunpe:

A Comparative Study of the Heroic Tales in Ancient Greece, Japan, and Ainu

TAKASHIMA Yōko left 1

**Urban-Culture Research Center,
Graduate School of Literature and Human Sciences,
Osaka City University**

片山廣子の新体詩「あかき貝」について

クリステイーナ・ロセツテイ『シング・ソング童謡集』との関わり

永井 泉

(要約) 片山廣子の新体詩「あかき貝」(明治三十三年)には、クリステイーナ・ロセツテイ『シング・ソング童謡集』の一篇との共通性がみられることに注目し、ロセツテイの作品と比較しつつ、同時代詩人の作品との関係も検討した。廣子の作品は、ロマン主義的子ども観の影響を受けながら、ロセツテイの童謡の表現スタイルや題材を取り入れて創作された新しい試みであると考えられる。

はじめに

片山廣子(明治一二年―昭和三二年 一八七八―一九五七)は、佐佐木信綱に師事し、短歌結社『心の花』(竹柏会)に所属した歌人で、かつ「松村みね子」の筆名をもつ翻訳家でもあり、イエイツやシングなどアイルランド文芸復興期の作品を中心に翻訳を発表したことで知ら

れる。その他に、小説や随筆、童話や詩も創作した。十歳より七年間、カナダ・メソジスト教会の女性宣教師創設のミッションスクールで寄宿舎生活を送り、キリスト教や聖書に関する深い教養を持っていたことが作品からも窺える。

このような廣子の短歌に、英国ヴィクトリア朝の詩人クリステイーナ・ロセッティ (Christina Georgina Rossetti 一八三〇・一八九四) の物語詩「ゴブリン・マーケット」に詩想を得たと考えられる作品があることから、筆者は廣子のロセッティ受容に着目してきた。ロセッティはイングランド教会の敬虔な信徒であり、聖書や信仰を主題にした作品も多い。他方、廣子は生涯クリスチャンにはならなかったが、「おそらく私の体臭の一部分ともなつてゐるだらう」と自ら述べるほど、ミッシヨンスクール在学时に聖書を教えられ、英文学にも親しんだ廣子に、同じ女性詩人であるロセッティの作品は示唆を与えた可能性があると考えられる。

本稿では、廣子の新体詩にロセッティの『シング・ソング童謡集』(一八七二年)の一篇との共通性がみられるものがあることに注目し、ロセッティの作品と比較しつつ、同時代詩人の作品との関係も検討し、廣子がこの一篇の散文詩に表現した内容やその背景を解釈したい。

(一) 廣子の新体詩とロセッティ童謡集

新体詩とは、明治期に創作された七五調、五七調の文語定型詩である。近年『佐佐木信綱研究』誌に掲載され、

片山廣子の新体詩にも触れられた座談会「新体詩とは何か」において、勝原晴希は、

明治十五年の『新体詩抄』から明治三十五年の『若菜集』までが、後の時代から整理した新体詩の時代。同時代的には明治四十五年までの三十年間が新体詩の時代ということになります²⁾。

と述べている。

廣子の新体詩として現在までに確認されているものは以下の四篇であり、それらもここで提示されている時代に発表されている。いずれも『心の花』に掲載された。

「川にのぞみて」(明治三三年八月)

「星」「鶴」(明治三三年九月)

初めて廣子が新体詩を発表した明治三十三年の六月に長男が生まれており、この年に廣子は短歌を発表していない。その頃の状況について後に、「妻として、母として、歌よみとしてその自己を確立していくためにたいへん悩んだ時期であった」と達吉の妻和子に語ったという。さらに、当時は女性による新体詩が少なかったことも考えると、廣子の新体詩はその数は少ないが、創作の方向性を模索する新たな試みであったと考えられる。

クリスティーナ・ロセッティは、イングランド教会の敬虔な信徒であり、信仰心や神の国、死をテーマにした詩も多いが、後年は詩のほかにも宗教的な散文も出版している。子どもを対象とした作品には『シング・ソング童謡集』の他、ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』(Alice's Adventures in Wonderland. 1865)の影響を受けたといわれる作品 *Speaking Likeness*. (1874) などがある。

『シング・ソング童謡集』(Sing-Song. A Nursery Rhyme Book.) は、一八七二年にロンドンで刊行された。一二〇編の詩から成り、各作品にタイトルはないが、すべての詩にアーサー・ヒューズによる挿絵が付いている。この童謡集に関する先行研究²⁾や、原稿を所蔵する大英図書館が公開している解説³⁾を参照しつつ、詩が扱っている主題を整理すると、以下の七項にまとめることができる。

- ① 母子関係
- ② 乳児の死と弔い
- ③ 自然の情景
- ④ 社会的弱者や小動物への思いやり
- ⑤ 他者への施し、分かち合い
- ⑥ なぞなぞやユーモア
- ⑦ 数や文字等に関する教育的なもの

また、③の自然をテーマにした作品に関しては、自然に神の真理を見る思想がその背景にあるといわれ、⁴⁾あるいは④や⑤に関しては、当時の階級やジェンダー間の不平等性に着目した作品もあるとみられている⁵⁾。

(二) 明治期における『シング・ソング童謡集』の受容
次に、「シングソング」が明治の日本文学でどのような受容されているのかを扱った先行研究を挙げる。

まず、薄田泣菫の「子守唄」については、自らが

子守唄は、明治四十一年頃の作です。クリスチナ・ロゼチの『しんぐ・さんぐ』を読んで、こんなのを作ってみたらと思つて試みたものですその當時はまだ昨今大流行の童謡といふ言葉はなかつたやうです⁶⁾。

と述べていることもあり、ロセッティ作品との関連が研究されている。泣菫が「子守唄」と述べる子どもを対象とした詩は、『お伽噺とお伽唄』(大正六年)にまとめられ、後に『泣菫詩集』(大正一四年)、『薄田泣菫全集』(昭和一四年)にも収載された三六篇の他、畑中圭一は、雑誌や新聞に掲載されて詩集には収められなかつた同類の作品が約二十篇あることを確認し、このうち、

『シング・ソング童謡集』の翻案・翻訳、あるいは主題等の借用は十篇あると指摘する。以下に、畑中がそこで挙げている泣菫の詩の一部と、その元と考えられているロセッティの詩の訳（安藤幸江による）を引用する。

① ロセッティ作品の翻訳または翻案と考えられるもの

星と花

星が空から落ちて来て、／花が代わりに撒かれたら、
空はやつぱり光らうし、／野路もきつと明るかる。

天の使がおりに来て、／星は残らず取り去るが、／
み空の花を拾ふには、／ああ羽はなし、＊しよんが
いな。

原詩（安藤幸江訳）

ほしが そらから おちてきて／はなが ほしに
かわっても／そらは やはり とても きれい／そ
して じめんも きれい／／
はねのある てんしたちなら おりにきて／ほしを
とることも できるでしょう／でも くもが さえ

ぎるので／わたしたちは はなが ほしいと おも
うだけこ

② モチーフの借用

三羽雀

わたしの裏の梅の木に／雀が三羽とまつて、／一羽
の雀のいふことに／「うちの子供のいたずらな、／
わたしの留守をよいことに／卵は盗む巢はこはず、
／なんぼ鳥でも生の子の／いとし可愛はあるもの
を。」（以下、二連および三連は省略）

原詩

かなしい べにひわのいうことを きいてごらん／
「ちいさくて あたたかいすを つくつたの／でも
ひどいおとこのこらが やつてきて／なつのいえを
おそつたの／「きちんとならんだ たまごを つ
ぶしたの／だから いま つばさをたれて／こわれ
たあとを じつとみている／もうおそくて つくれ
ない かなしくて うたえない

また、島崎藤村『若菜集』（明治三十五年）にも『シング・ソング童謡集』との関わりがあるのではないかという指摘がある。関栄一は、『若菜集』収載の「秋風の歌」の最終連、

あゝうらさびし天地の／壺の中なる秋の日や／
落葉と共に 飄る／風の行衛を誰か知る

について、「「最終連の最後の」二行は、D・G・ロセッテイの妹でやはり詩人のクリスチナ・ロセッテイの詩「風」の詩想に通じる。」と述べ、「風」の原詩と訳詩を掲げている。

Who has seen the wind? / neither you nor I: / But when
the trees bow down their heads / The wind is passing by.

誰が風を見ましたか？／あなたも私も見やしない／
しかし木々が頭をさげるとき／風がすぎさってゆく
のです

Who has seen the wind? / neither I nor you: / But when
the leaves hang trembling / The wind is passing through

風が／誰が風を見ましたか？／私もあなたも見やしない／しかし木の葉がゆれるとき／風がとおりすぎてゆくのですおこ

目には見えない「風」の存在を木の葉の動きに重ねてみている点、そして過ぎ去った後どこに行くのかわからない、風のあてどなさを歌っている点に、両者の作品の共通性をとらえているといえよう。

ロセッテイ『シング・ソング』が明治期の詩人の作品に与えた影響に関してはこのような指摘がなされていることを踏まえ、続いて廣子の作品をみてみたい。

(三) 廣子の新体詩「あかき貝」

廣子の散文詩のうち、ロセッテイの童謡集からの影響を検討したい作品は、以下の「あかき貝」である。

あかき貝（『こころの華』第三卷第八号 明治三十三年）

人の子等は かくのごとく
私なき ものなりしを

春の海の	聲しづか
よする波の	波のきはに
我のひとり	歩み來れば
五つ六つの	うつくしき子
そのめのとゝ	砂の上に
うつむきつゝ	貝を拾ふ
やがて彼等	あかき貝を
三つ拾ひぬ	二つ三つと
そを数へて	其子いひぬ
この一つは	母の君に
この一つは	姉の君に
この一つは	兄の君に
されば我の	一つ足らず
いかにうばよ	なほさがして
かくて彼等	尚さがしぬ
されど貝の	あかき貝の
見えずあれば	悲しげにも

かの子は尚 尚さがしぬ
 そこにめのと あかき貝を
 一つ獲たり かの子は
 見たりし時 舞ひをどりぬ

この詩は、語り手が海辺で出会った子ども様子を歌っており、家族のために貝を拾いつつ、さらに見知らぬ人である語り手にも探してあげようと苦心し、やっと見つけて喜ぶ姿に、語り手はその子の私欲なき美しい心情をみる、と解釈できる。

この作品と関係があると思われるロッセッティの作品およびその訳を挙げる。

*Mother shake the cherry-tree, / Susan catch a cherry;
 Oh how funny that will be, / Let's be merry! / One for
 brother, one for sister, / Two for mother more, / Six for
 father, hot and tired, / Knocking at the door.*

おかあさんが さくらんぼのきを ゆする / スーザ
 ンが さくらんぼを うける / ああ なんて おも
 しろいのだろ / たのしく やろう / おにいさんに

ひとつ おねえさんに　ひとつ おかあさんには
もう　ふたつ／おとうさんには　むつつ　あつく
て　つかれて／おかえりだから

両者を見ると、ロセツテイの作品は童謡であり、廣子の方は、子どものための作品ではないという違いがある。他方、どちらも子どもが家族のためにとそれぞれ「さくらんぼ」あるいは「あかき貝」を拾うという情景に、そして「さくらんぼ」と「あかき貝」がどちらも小さくて赤いものだという点に共通性がみられる。なお、ロセツテイのこの詩は、先に挙げた泣菫の「子守唄」の一篇にも影響を与えたとみられている。

うちのお庭の桃の木に／乳母のやうな夏の日が／日
がな一日来ていたが／やんがて桃が熟れてそろ／一
つは母のふところに／一つは兄の手のひらに／残る
一つは誰にやる／さういふ私の口にやる¹³

この作品について、畑中は「主題や題材の面では、両者の間に共通点は見いだせない。ただし、下線部〔引用者注・ここでは傍線部〕の表現スタイルについてはかなり近い関係をみいだすことができる。¹³」と述べる。廣

子の「あかき貝」も、このような「表現スタイル」という点でロセツテイとの共通性をみることが可能である。

他方、廣子とロセツテイの作品には違いもある。まず、ロセツテイの方では、さくらんぼを兄と姉にひとつずつ、母にはさらに二つ、そして父には多く六つを、というように親とくに父親を敬う姿勢を表しているのに対し、廣子の詩では、母、兄、姉にひとつずつであり、父は登場しない。それは、泣菫の作品でも同様である。

なお、原詩の最後の二行を安藤訳では父が「暑くて疲れておかえりだから」と、父に多くあげる理由としてとらえられているが、大正一三年に発表された西条八十の訳では、

母さんが桜の樹を揺り／スウザンがその実を受けと
める／その時やどんなにかしかる／その時やどん
なに楽しかる。／一つは兄さん、一つは姉さん、
／あとの二つはお母さん、／お父さんには六つとき
めて／汗も拭かずに扉をたたく¹⁴

となっており、八十の解説でもこの場面は、子どもが拾った実を握って「汗も拭かず大急ぎで父親の書斎の扉をたたく¹⁵」。と記されており、解釈が異なる。この点は、

原詩から父を敬う気持ちをどの程度読み取るかによって違いが生じているといえよう。いずれにしても、廣子や泣菫の作品には、父にもっとも多く与えるという家父長的家族観はみられない¹⁶。

では、廣子の作品の主題は何か。冒頭に題辞のようにおかれた「人の子等は かくのごとく／私なき ものな りしを」という、子どもに備わる私欲なき心の賛美である。これについては、廣子と同時代詩人の作品にもみられる、英国ロマン主義の詩から影響を受けた子ども観との関係を検討する必要がある¹⁷。

(四) 「子ども賛美」を主題とする同時代作品

明治期の文学作品におけるロマン主義的子ども観について、河原和江は以下のように概観する。

日本の近代文学において最初に、ロマン主義的観点から〈子ども〉を通して大人の重要な問題を描いたのは、国木田独歩であろう。処女小説『源叔父』(明治三十三年)以来、彼の代表作のいくつかに子どもが重要なモチーフとして登場する。独歩はイギリ

スのロマン主義詩人ワーズワースの影響を強く受け、とくに『源叔父』や『春の鳥』(明治三十七年)では、ワーズワースの詩から主題や人物像など、多くの素材を得ている¹⁷。

このように述べられる国木田独歩の作品のうち、子どもを詠んだ詩には、明治三十年の次のような作品がある。

門邊の兒供¹⁸

街の塵にまみれつゝ／浮世の風に吹かれつゝ／門邊に遊ぶ子供等の／よろこぶ様を見る毎に／／あはれ子供よなれも亦／住みて悲しきあさましき／此世に生れをひたちて／／げに哀れぞと思ひやり／空ゆく雲をながめては／雲のゆくへのきはみなき／深き思に沈むなり

この作品は、子どもに備わる美質を賛美するものではないが、悲しくあさましいことも多いこの世に生まれた子どもを哀しみつつ、「門邊に遊ぶ子供等の／よろこぶ様」とあるように、子どもをまだこの世の悲しさを知らず、「街の塵」にはまみれつつも、深いあさましさには

まみれていない存在として見ている。つまり、未熟な子どもが成長して大人になるという見方ではなく、子どもの方が汚れなく尊い存在であうというところえ方に通じる。また、独歩はキリスト教に強く惹かれていたことから、現世よりも天上の世界に価値を置き、この世に生まれてきてしまった子どもを哀れむ気持ちがあったのではないか。

独歩の他にも、キリスト教者として伝道に力を注いだ詩人、宮崎湖処子にも子どもを賛美する次の作品がある。

おもひ子²⁰

いつれの星かわか庭に／落ちてわ子とはなりにけむ、
／汝が愛らしき面には／天つひかりの輝けり。

(第二、三、四連省略)

天つ国にて大いなる／汝ゆゑにあるかなき身にも、
／めぐみの露のかゝるか／思へばいとこそ嬉しけれ

この作品では、子どもを天から落ちてきた星に喩え、その顔が「天つひかり」に輝いているとあることから、子どもを天上世界からの恵みであり、神に近い存在であ

るととらえているといえよう。最終連ではより明確に「天つ国にて大いなる／汝ゆゑ」や、「めぐみの露のかゝる」という表現のあることからわかる。

また、土井晩翠にも子どもを賛美する作品がある。

小兒²⁰

くしく妙なるあめつちの／何に譬へむをさなごよ／
清き、いみじき美はしき／汝がこゝろねを面影を／
／薫ほるさゆりの花片に／おくあけぼのゝ白露か／
緑色こき大空に／照るくれなゐの夕づゝか／霞の
裾に波絶て／静けき春のあさなぎか／雲雀の床と萌
えいでゝ／野邊をいろどる若草か／／我世の秋の寄
するとき／紅にほふかんばせに／愛の光をかゞやか
す／なれはのどけき春の日か。

(以下、第五、六、七連略)

この作品でも、子どもの美質を自然界に存在するさまざまな美しい事象、先の湖処子の作品のように、天上からの恵みだと感じられるような美しい自然の様相に喩えている。この詩について、本間久雄はロマン主義的子ども観との関係を次のように述べている。

「小兒」を純真無垢なものとして、そこに崇敬の念を寄せることは聖書の昔からあり、又、西洋近代の詩人だけでも、小兒を以て「偉大な預言者」と云ひ、「大人の父」と云つてゐるワアヅワアスや「子供は樂園への鍵かぎである」と云つたストッダアド (R. H. Stoddard 一八二五—一九〇三) を始め人口に膾炙したものが相当にある。晩翠のこの『小兒』亦これらに伍し得べきものである²¹⁾。

ここで本間久雄が挙げているウイリアム・ワーズワースの作品は、次のものであると考えられる。

幼少時の回想から受ける靈魂不滅の啓示²²⁾

子どもこそおとなの父、
願わくは一日一日が、生來の
自然への敬虔な心で結ばれるように。

I
かつては牧場も森も小川も／大地も、目に映るあり
とあらゆる光景が／わたくしにとつて／

天上の光に包まれて見えた。／夢の中の栄光と瑞々しさに包まれて見えた。／だが今はかつてとは異なる。／どちらを向いても／夜であれ昼であれ／もはや今、かつて見えたものを見ることはできない。

(第二―第七連省略)

VIII

幼子よ、そのうわべの姿からは証し得ぬ／魂の底深さ。／最高の哲人たる幼子よ、いまだな失わぬ／神からの遺産、盲人にまじつてただ独り眼を開き、／耳を閉ざし、口を閉ざすが故に読み取る永遠の深み、／永遠なる心に永久にとり憑かれたればこそ―／偉大なる予言者、祝福されたる予見者たる幼子よ、／まさに真理を宿す幼子、／その真理を求めて人は一生を費やす、／暗闇に行き暮れ、墓穴にも比すべき暗闇に。／幼子よ、幼子の上に不滅の魂が／太陽のように垂れ込めるさまは、まるで奴隷に対する支配者、／避けることのできない存在。

(第九、十、十一連省略 傍線引用者)

なお、国木田独歩もこのワーズワースの詩を強く心にとめていたことが、以下の記述から分かる。

午前ウォーズウォースの一不死のオード「引用者注・前掲の訳詩の原題には Ode を含む」を読む。再讀三讀愈々其の妙諦を感得す。彼は小児のインノーセントを、及び其自由にして自然なる喜びを信じぬ。この「信」を通じて靈の不死を見たり²³。

明治期の文学者に影響を与えたロマン主義歴子ども観のなかでも特に、ワーズワースのこの詩はその代表的なものであったといえる。このように明治期の文学者にワーズワースに代表されるロマン主義的子ども感が浸透していたことを踏まえると、廣子もそのような思想や作品から影響を受けた可能性は十分に考えられる。また、「あかき貝」には題詞のような一節があり、ワーズワースの詩との関連もうかがえる。

さらに、廣子の同時期の散文や翻訳作品をみると、このようなロマン主義的子ども観に近い思想が表現されているものがある。

(五) 新体詩と同時期に書かれた廣子の翻訳・随想

廣子の翻訳作品として活字化されたものとしては第一

作目になる「自然の美」（原作は、ホアキン・ミラー Joaquin Miller. "What is Poetry" 一八八五年）では、自然の美しきこそが「詩」であり、それを甘受できる人間こそが、たとえ文学としての詩を読んだりみずから詩作をしたりしなくても真の「詩人」である、ということが述べられている。そして、そうした性質は人間が私欲・知識・富をもつことで失われるのだという見方がよみとれる。この随想では「子ども讚美」が主題ではないが、子どもに触れた個所として次のような部分がある。

吾等学校にゆきては、仏語を学び、文学美術を学び、其他さまざまの道を学ぶ。されど自然の書よりは、一物をも学ぶことなし。世の父兄は、其子弟がまづ第一にかのタイルの都をたてざらん事を恐るゝにや。御空にうるはしき星を詠めよと教へられなば、泥土の中に黄金を求むる事は忘れやすくとあやぶむにやあらん。
：中略：去年の事なりき。森に逍遙しつゝ書を読む大學生を見し事ありき。こは自然を侮辱せしならずや。かの苔むしたる老木の梢どもの、声なく言なくしてしかも何事かを語るが如く、長く強げなる手をさしのべたるも、其めには見えずやありけん。彼にして一点美をめぐる心あらば、いかでかゝるあたりに立ちて書を

よむ事を得ん。あはれくかくしつゝ其かしらは充た
さるゝ事を得べし。されど其心は何時迄も空しくてあ
らん。〔傍線引用者〕²⁴

傍線部に書かれているように、子どもは学校で知識を
身に着け語学や文芸を学ぶことはあっても、自然から学
ぶ機会に恵まれていない。その親も、子どもに実利的な
方面の力をつけさせようとする。その結果、たとえ大学
生になり知識や学力は身についても、自然を愛でその美
を感じる心は育っていない、ということになり得る。こ
の随筆ではそのような人間のあり様を憂いており、むし
ろ知識や富、私欲を持たない人間のなかにこそ、自然の
美を甘受できる、ほんとうの詩人が存在すると述べる。

また、この翻訳と同時期に発表された廣子の随想には、
自然の美をめぐる子どもの様子を描いている箇所があ
る。

停車場前の大木の花は半ばちりて、中より赤き葉の
いでたる、秋の紅葉をも一つに見るが如し。其陰に
うなる三人四人、みかん箱ばかりの車に、いろ黒き
幼子載せて、あなたこなた押しまはし居たり。花の
吹雪のかゝる毎に、子は嬉しげに打笑ふも、美を喜

ぶ心は、かく幼くても猶あるものにや²⁵。

美をめぐる心を子どもはすでに持っていることに對す
る感嘆がみられ、これは「自然の美」を翻訳した廣子で
あればこそ、印象強く受け止めたのであろう。それはま
た、先に引用したワーズワースの詩の一節、「かつては
牧場も森も小川も／大地も、目に映るありとあらゆる光
景が／わたくしにとつて／天上の光に包まれて見えた。」
にある、子どもこそ自然の美を真に見ることができると
いう思想に通じる感慨であろう。

(六) ロセツテイの作品との比較

ここでふたたび、ロセツテイの作品と比較してみたい。
先にも述べた通り、廣子の作品は子どものために書かれ
たものではなく、子どもの言動に現われたその心を賛美
する作品詩である。

他方、廣子と同時代の詩人による「子ども讚美」の詩
が、一貫して子どもの美質を称える文句を連ねているの
に對し、廣子の詩「あかき貝」は、題辞的な冒頭部にお
いては、子どもが私欲なき心をもっていることを称えて
いるが、後は子どもの言葉や行いを細かに描写している。

この点は、さくらんぼを採る子どもたちの様子を描写しているロセツテイの童謡と共通している。廣子は新体詩を書くにあたり、こうした表現の仕方から影響を受けたのではないだろうか。そして、同時代詩人が美しくうたった「子ども」という題材を取り上げつつも、詩的な喩えを用いて子どもの様相を表現するのではなく、子どもの言動そのものを細やかに表すという独自の詩を試みたといえるのではないだろうか。

おわりに

片山廣子の新体詩と、クリステイーナ・ロセツテイの童謡との関係を、同時代詩人の作品におけるロセツテイ受容、およびロマン主義的子ども観も含めて検討した。廣子はこの後、大正および昭和期に童話や児童向けの翻訳作品を発表するが、すでに初期の創作において「子ども」に着目し作品に表現していたことは注目に値する。ロセツテイの『シング・ソング童謡集』の近代日本における受容に関しては、その影響を受けて創作された薄田泣菫の子守唄が近代日本の童謡の先駆けとして重視されてきた。だが、『シング・ソング童謡集』が泣菫よりも早く廣子に読まれ、その新体詩創作という新しい試み

に詩想を与えた可能性を考えると、近代日本の詩史におけるロセツテイの影響はより広く及んでいることが考えられ、その受容状況はあらためて注目すべき課題である。

¹ 片山廣子「身についたもの」『新編 燈火節』月曜社、平成一九年（底本は『燈火節』昭和二八年、暮らしの手帖社）一一三頁。

² 勝原晴希・佐佐木幸綱・松岡秀明・山本陽子「特集座談会『新体詩とは何か』」、『佐佐木信綱研究』第三号、平成二六年、十一頁。

³ 秋谷美保子『片山廣子全歌集』短歌研究社、平成二四年、三四八頁。

⁴ 滝沢典子「薄田泣菫と子守唄」『近代の童謡作家研究』翰林書房、平成二二年。

高橋美帆「クリステイーナ・ロセツテイと大正期の童謡運動」『奈良工業高等専門学校研究紀要』第四十号、平成十六年。

⁵ Manuscript of *Sing Song*, a collection of nursery rhymes by Christina Rossetti. British Library.

<https://www.bl.uk/collection-items/manuscript-of-sing-song-a-collection-of-nursery-rhymes-by-christina-rossetti>
(最終閲覧日平成三十一年二月二十日)

⁶ Maria Keaton, "Mistic, Madwoman or Metaphysician?: The Analogical Theodicy of Christina Rossetti." *Outsiders looking in : the Rossettis then and now*. Ed. by D. Clifford et al. 2004. に詳し。

7 前掲資料6

8 薄田泣菫「詩集の後に」『泣菫詩集』大阪毎日新聞社、大正十四年、一九頁。

9 畑中圭一「薄田泣菫の童謡について—Ch.ロッセッティ：Sing-Songへの関わりを中心に—」『児童文学論叢』第一号、平成七年十一月。

10 安藤幸江訳『クリステイーナ・ロッセッティ SING-SONG A NURSERY-RHYMS 訳詩集 シング・ソング童謡集』文芸社、平成一四年。以下、安藤の訳詩はこれに拠る。
11 関栄一「補注『若菜集』」『日本近代文学大系十五 藤村詩集』五八七・八八頁。

12 薄田泣菫「子供の唄(2)」『大阪毎日新聞』大正四年六月二十日。
13 前掲書9、十七頁。

14 『童話』大正一三年五月。引用は『西條八十全集 第五卷』図書刊行会(平成七年)に拠る。

15 西條八十「夏をうたった童謡」『西條八十全集 第一三卷』図書刊行会、平成一一年、二七〇頁

16 なお、ロッセッティのこの詩に関しても、その場に父親は不在であり、戸を叩かなければそこに入れない、つまり母親と娘、女性の使用人が楽しく過ごす場の扉には鍵がかかっていることに着目し、ロッセッティの父親に言及した以下の論考もある。

Sickbert, V. "Christina Rossetti and Victorian Children's Poetry: A Maternal Challenge to the Patriarchal Family"

Victorian Poetry. Vol.31, No.4. 385-410.

17 河原和江『子ども観の近代—『赤い鳥』と「童心」の理想』中央公論社、平成十年、六二頁。

18 「獨歩吟」宮崎湖処子編『抒情詩』民友社、明治三十年、十七頁。

19 『湖処子詩集』右文社、明治二六年、三六・三八頁。

20 『帝国文学』明治三十年十一月号、五七・五八頁。後に『天地有情』(明治三二年)に収載。

21 本間久雄『続明治文学史 上巻』昭和十八年、一〇六頁。

22 『対訳 ワーズワス詩集—イギリス詩人選(3)』山内久明訳、岩波書店、平成十年、一〇五・一二七頁。

原詩 Ode: Intimations of Immortality from Recollection of Early Childhood は *Poems* (一八一五年)に収載(初出である一八〇七年版では題詞なし)。

23 『欺かざるの記 後篇』(明治二七年七月四日の記述より)隆文館、明治四二年、五頁。

24 片山廣子「自然の美」(ミラー)『心の花』第四卷第三号、明治三四年三月、二頁。

25 片山廣子「長き一日(下)」『心の花』第四卷第三号、明治三四年三月、二四頁。

「研究科プロジェクト」成果報告書
『日本文学を世界文学として読む』

平成三十一年（二〇一九）三月三十一日発行

編集 山本 真由子

発行 大阪市立大学大学院文学研究科
都市文化研究センター

〒五五八―八五八五

大阪市住吉区杉本三―三―一三八

電話〇六―六六〇五―三一―一四

印刷 博進印刷株式会社

〒五五九―〇〇〇二

大阪市住之江区浜口東二―七―二四
